

2017年6月1日

監査役会通信 (No.15)

経理部長
松尾 香那子

会計の未来

「10年前には想像していなかったけれど、今起きていることは何ですか？」

先日、某監査法人が主催する「2027年 進化する会計の未来」というテーマのセッションに参加させていただき、その冒頭でこう問われたのです。

改めて考えてみると、私自身が身近に感じる一番の進化は、やはりスマートフォンではないかと思います。

ちょうど10年前の2007年、私は折りたたみ型の携帯電話を使用していましたが、同年に発表された初代iPhoneにはあまり興味がなく・・・スマートフォンを四六時中手放さない現在の生活は、当時、まったくもって想像できませんでした。

初代iPhoneの容量はたった4MB。それが今や、iPhone7では最大256GB。カメラは1,200万画素（写真容量は約2MB）もの性能になり、iPhone自体のスペックの強化に加え、アプリ等の目覚ましい進化により、人々の生活はがらりと変化しました。

私のカバンからは、デジタルカメラ、新聞、本、オーディオプレーヤー、万歩計、印刷したお店の地図、時刻表などなど、数え切れないほどのものがなくなり、驚くほど身軽になりました。

会計の業界では、今後、AI（人工知能）等の進化により、請求書や預金通帳の入出金記録から自動で仕訳が登録されたり、それどころか、有価証券報告書や税務申告書までもが自動的に作成される時代が来るのでは？とされています。

想像するに、定常的に発生する仕訳については、AIがパターンを学習し、請求書等に基づいて自動的に仕訳を行うことは充分可能だと思います。人間が「えーっと、どの勘定科目だっけ・・・？」なんて悩んでいるうちに、1万件くらいの処理を終えているかもしれません。消費税区分なんかも、消費税法がインプットされたAIにはお手のもの。同様に、固定資産の耐用年数だって、耐用年数表を調べる必要もなく、固定資産台帳の作成から減価償却費の計上まで、すべて自動的に行うことができるようになるでしょう。

話はそれますが、イギリスでは、AIの「裁判官」が開発され、過去の裁判の判例からAIが判決を下す実験が行われているそうです。このことから、AIは私が想像する何十倍、何百倍もの複雑な判断が可能なのかもし

れない、と思うようになりました。しかし、複雑な判断であればあるほど、そのパターンを学習するための大量のデータが必要になるのではないかと思います。

会計の話に戻すと、定常的な仕訳のみならず、四半期ごとの決算で計上される貸倒引当金や棚卸資産の評価等についても、過去に行ってきた判断の蓄積から AI が自動的に仕訳を行うことができるようになるのかもしれない。しかし、こういった過去の判断の蓄積は、四半期決算処理であれば、5 年で 20 件、10 年で 40 件。会計の場合、決して大量のデータであるとは言えませんが、はたしてどのレベルの処理ができるようになるのか、とても興味深いところです。

実際のところ、おそらく人間は、AI の情報処理能力には到底勝つことはできないと思います。とかく「経理の仕事がなくなる」と悲観的に語られがちですが、その処理が正しいかを判断すること、これは人間にしかできないのではないのでしょうか。例えば、請求書の字面だけを追いかけた処理が 100%正しいかという、実務を行っている私からすると、一概に正しいとは言いきれない、そう思うのです。固定資産に該当するものが経費として処理されていないか、前払費用や前受金等も正しく処理されているかどうか。

どういったルールに基づいて、どういった処理が自動的に行われているのか。財務諸表ができるまでのすべての仕組みを理解し、リスクを判断すること。そのリスクをコントロールすること。AI により自動的に財務諸表が作られるようになったとしても、その財務諸表が正確で適正であると、自信をもって言えること。これが今後の経理に必要な力なのではないかと思います。

私が 10 年前に現在のスマートフォンの進化をまったく想像できなかったのと同じように、きっと 10 年後も、上述の想像をはるかに超えた驚く未来が待ちわびていることと思います。

会計の未来はきっと面白い！